

＜今日の説教のポイント 出エジプト記4章18～31節＞

1 (18-20) 神に降参したモーセ、神が示された道を進み出す。

あれだけ神様の命を拒み続けたモーセが、ついに神様に降参して歩み出しました。すると神様は、恐れていた者たちは皆死んだという朗報をモーセに告げられました。神様に降参するという事は、神様が必ず開き続けて下さる道を行くということなのです。その神様を信じて歩み出したモーセの姿を、「手には神の杖を携えて」(20)に見ることができないのでしょうか。

2 (21-23) 聖書は、部分から全体でなく、全体から部分を考える書。

「しかし、わたしが彼の心をかたくなにするので、王は民を去らせないであらう」(21)、が気になります。文字通り受け取るなら、王の抵抗は神様に責任があるということになるからです。同様の表現は旧約聖書でよく使われています。しかし、聖書全体から考えたなら、そんなことを伝えようとしているはずありません。聖書は、部分から全体ではなく、全体から部分を考えて読むことが大事です。ここでは、最終的には王の強情さすらもご自分のご計画の中で用いられる、神様の御支配を思い巡らすべきでしょう。

3 (24-26) モーセも罪を犯す、助けと救いを必要とする人間。

不思議な話ですが、意味は案外はつきりしています。モーセが自分の子に割礼(創世記17:14)を受けさせていなかったことを神様が問題視され、妻のツィボラがその危機を救った話です。モーセも罪を犯していたということ、しかし、妻によって、あるいは、アロンによって助けられる中で用いられたのです。ほっとさせられる内容ではないでしょうか。

4 (27-31) 神様のなさり方がある。それを信じて歩むのが信仰者。

モーセが一番悩んでいた吃音の問題を克服するために神様が用意して下さったがアロンでした(4:14-17)。モーセはその神様の言葉に従い、彼と共に事を為していった結果、色んな心配は全て杞憂であったことを知りました。それどころか、イスラエル人たちは、主が自分たちの苦しみを見ておられ、救おうとされていることを知って、この主なる神様を礼拝したのです(31)！ 聖書の神様の救いのなさり方を思います。私たちも、それを聖書からよく理解して仕えて行きたいと思います。